

1. 略歴

1997年4月	上智大学文学部英文学科 入学
2001年3月	同 卒業
2001年4月	上智大学文学部哲学科 入学 (3年次学士入学)
2003年3月	同 卒業
2003年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野修士課程 入学
2005年3月	同 修了 (修士 (文学) 取得)
2005年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程 進学
2006年6月	東京大学大学院人文社会系研究科 21世紀COE「死生学の構築」リサーチアシスタント (~2007年3月)
2007年10月	東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOE「死生学の展開と組織化」リサーチ アシスタント (~2008年3月)
2010年3月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程 単位取得退学
2010年4月	上智大学大学院哲学研究科 特別研究員 (~2013年3月)
2013年5月	東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター (上廣死生学・応用倫理講座) 特任研究員
2013年9月	博士 (文学) 取得 (東京大学大学院人文社会系研究科)
2014年4月	三重県立看護大学看護学部看護学科 准教授
2017年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 特任准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

行為論、ケアの倫理、臨床死生学

b 研究課題

(1) ケアの倫理における「共感」と「認識上の責任」についての哲学的分析とその臨床的展開

ケアの倫理における中心概念である「共感」に関して、その身体的・情動的側面を踏まえつつも、(これまで見落とされがちであった) その認知的・知性的側面を主眼的に分析する。そのことを通して「共感」とそれに伴う「認識上の責任」を、臨床の場に即した複雑さと深みを備えたものとして理論化する。

ケアの倫理によれば、従来の功利主義的な生命倫理は、患者 (患者家族) の置かれている具体的な状況に関する「認識上の責任」(責任をもって認識すること) を果たしていない点で不十分だとされる。このような具体的な状況の認知において、共感が重要な働きをすることは疑いえない。しかし他方、共感には認知的なバイアスが働くことが指摘されている。そこで、共感 (共苦) の危うさや困難さを踏まえつつ、医療従事者—患者 (患者家族) 関係における望ましい共感のあり方と、それに伴う認識上の責任を明らかにする。

(2) 関係的な自律論の構築とその臨床的展開

ケアの倫理の立場から関係的な自律論を構築すると同時にその臨床的応用を試みる。生命倫理における個人主義的な自律論は、個人の独立性と他者からの不干渉を基調とする自己決定を核としてきた。それに対してケアの倫理は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目する。そして一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。しかしながら、依存性と自律性は緊張関係にもあるため、個人主義的な自律論はなお根強い。そこで、自律性と依存性の諸相および自律性と依存性の結びつきについて徹底的に検討することを通して、関係的な自律論をより十全なものにする。そのうえで、医療従事者・患者・患者家族、それを取り巻く社会的／文化的環境という要素を考慮しつつ、関係的な自律の概念を、臨床における共同的意思決定プロセスに適用するものへと鍛え上げた。

c 主要業績

(1) 論文

「アンスコムの実践的推論—推論図式に関する一考察」、『哲学論集』第34号, 上智大学哲学会, 2005年10月, 73-91頁.

- 「意図的行為の目的指向性」, 『論集』第24号, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室, 2006年3月, 313-326頁.
- 「アンスコムにおける知識と行為」, 『論集』第26号, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室, 2008年3月, 177-191頁.
- 「分析的行為論におけるケア概念—分析哲学の行為論の新たな展開にむけて」, 『哲学』第59号, 日本哲学会編, 2008年4月, 261-276頁.
- 「ナラティブ・セラピーとケア—当事者の物語の重視とは何か」, 『応用倫理・哲学論集』第4号, 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室+グローバルCOE「死生学の展開と組織化」, 2009年7月, 83-97頁.
- 「権威的な欲求と自己理解の動的側面」, 『行為論研究』第1号, 行為論研究会, 2010年3月, 33-53頁.
- 「言葉と共感的交流」, 松永澄夫編『言葉の喜び・哀しみ』, 東信堂, 2011年3月, 273-301頁.
- 「ケアにおける他者感受的な行為者性」, 『哲学科紀要』第37号, 上智大学文学部哲学科, 2011年3月, 37-61頁.
- “Caring and Vulnerable Agency,” 『行為論研究』第3号, 行為論研究会, 2014年3月, 1-10頁.
- “The Virtue of Receptivity and Practical Rationality,” Chienkuo Mi, Michael Slote, and Ernest Sosa eds. *Moral and Intellectual Virtues in Western and Chinese Philosophy: The Turn toward Virtue*, Routledge, 2015年10月, pp.235-251.
- 「苦しみの認知からの逃避と認識をめぐる責任—ケアの認識論へ」, 『グリーンケア』第5号, 上智大学グリーンケア研究所, 2017年3月

(2) 研究発表

- 「アンスコムの実践的知識」, 第56回日本倫理学会大会, 岡山, 2005年10月.
- 「欲求の権威性と自己知の動的側面」, 第39回日本科学哲学会大会, 札幌, 2006年10月.
- 「分析的行為論におけるケア概念—分析哲学の行為論の新たな展開にむけて」, 第66回日本哲学会大会, 千葉, 2007年5月.
- 「ナラティブ・セラピーとケア—当事者の物語の重視とは何か」, 第15回応用倫理・哲学研究会, 東京, 2007年7月.
- “Receptive Agency in Caring: Implications for Philosophy of Action,” The 6th International Meeting of Hongo Metaphysics Club, Tokyo, 2008年3月.
- 「ケアの観点からの「十全な意味での行為者性」に関する分析」, 第41回日本科学哲学会大会ワークショップ「行為論の新展開—行為者性と権威性」提題者, 福岡, 2008年10月(依頼あり).
- 「ケアの倫理からケアの行為者理論へ」, 第26回日本現象学・社会科学大会ワークショップ「ケアの哲学」提題者, 千葉, 2009年12月(依頼あり).
- “Rethinking Individualistic Conceptions of Care in Philosophy of Action,” The 21st International Meeting of Hongo Metaphysics Club, Tokyo, 2012年3月.
- 「行為者性を捉えなおす—「気にかかる」というケアの様態から」, 第64回日本倫理学会大会, 松山, 2013年10月.
- “Caring, Empathic Receptivity, and Temporally Extended Agency,” Ethics Workshop, Miami, 2013年11月(依頼あり).
- “The Virtue of Receptivity and Practical Rationality,” The Virtue Turn: Virtue Ethics, Virtue Epistemology, and Chinese Philosophy, Taipei, 2014年5月(依頼あり).
- “Rethinking Diachronic Agency: A Care Perspective,” The American Philosophical Association, Pacific Division Annual Meeting, A Main Program Session, Vancouver, 2015年4月(依頼あり).
- 「共苦の可能性と不可能性について」, 第1回ケアの哲学学会大会シンポジウム「ケアと哲学のリエゾンに向けて」提題者, 東京, 2016年9月(依頼あり).
- 「他者志向的な感情・感受性を中心に据えた徳倫理学の可能性」, 第76回日本倫理学会大会ワークショップ「徳倫理学ワークショップ4—非アリストテレス的な倫理学」提題者, 東京, 2016年9月(依頼あり).
- “Receptivity and Living Reflectively with Others,” 2016 Soochow International Workshop on “Knowledge and Action,” Taipei, 2016年10月(依頼あり)

(3) 書評等

- 「限界と反復」, 『哲学研究論集』第1号, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室, 2004年3月, 59-72頁.
- 「Michael Tye, “Sortes Paradox and the Semantics of Vagueness”」, 『哲学研究論集』第2号, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室, 2005年3月, 132-141頁.
- 「Roger Rosenkranz, “Why Glymore is a Bayesian?”」, 『哲学研究論集』第3号, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室, 2006年5月, 106-119頁.
- 「Bredley Armour-Garb, “Diagnosing Dialetheism”」, 『哲学研究論集』第4号, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室, 2007年9月, 87-97頁.

「Emst Nagel の「生物学における目的指向的な過程」, 『哲学研究論集』第5号, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室, 2008年3月, 77-86頁.

「ローゼンバーグの“Altruism: Theoretical Context”のレビュー」, 『哲学研究論集』第6号, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室, 2010年3月, 47-56頁.

“Review: From Enlightenment to Receptivity: Rethinking Our Values,” *Revista Espanola de Pedagogia*, 72/257, 2014年5月, pp.366-369.

(4) 翻訳

ミハエル・ハイデルベルガー「生命のないものと生きもの—ネオ・アリストテレス的なアプローチは可能か?」, 『死生学研究』第9号, 東京大学大学院人文社会系研究科・グローバルCOE「死生学の展開と組織化」, 2008年3月, 44-59頁. (共訳)

G・E・M・アンスコム「実践的推論」, 門脇俊介・野矢茂樹編監修『自由と行為の哲学』, 春秋社, 2010年8月, 191-258頁.

3. 主な社会活動

(1) 非常勤講師

東京有明医療大学 非常勤講師 (2010年4月~2016年7月)

上智大学文学部哲学科 非常勤講師 (2013年4月~2014年3月)

(2) 学会

哲学会会員 (2003年4月~現在)

上智大学哲学会会員 (2003年4月~現在), 同委員および編集委員 (2010年4月~2013年3月)

日本倫理学会会員 (2005年8月~現在)

日本科学哲学会会員 (2006年12月~現在)

日本哲学会会員 (2006年12月~現在)

第25回日本生命倫理学会大会実行委員 (2013年5月~12月)

The American Philosophical Association 会員 (2015年4月~現在)

ケアの哲学学会会員 (2016年9月~現在)

(3) 臨床倫理セミナー等活動

「医療・介護従事者のための死生学 夏季セミナー」運営補助, 東京大学, 2013年8月.

「臨床倫理セミナーin さっぽろ」運営補助, 札幌, 2013年8月.

第25回日本生命倫理学会年次大会「死生学と生命倫理」運営補助 (大会実行委員), 東京大学, 2013年11~12月.

「臨床倫理セミナーin あしや」運営補助, 市立芦屋病院, 2013年9月.

シンポジウム「人生の最終段階のケア—支える文化の創成に向けて」運営補助, 東京大学, 2014年2月.

「臨床倫理事例研究会」運営補助, 大阪, 2014年3月.

「臨床倫理リーダーシップ養成コース@大阪」運営補助, 大阪2014年3月.